

# 大正期の日本における通信教育による西洋音楽の普及について

## ——大日本家庭音楽会の活動を中心に

上野正章

明治期に導入された西洋音楽は、大正期に入るとさらに注目を集めるようになっていった。特に著しいのが、西洋音楽を演奏する楽しみの浸透である。近年の洋楽研究の進展によって、地方都市においても活発な演奏実践が行われていたという事実が明らかになりつつある。

しかしながら、地方に住む音楽愛好家達は、いったいどのようにして西洋音楽を学んだのだろうか？ 大正期、大都市とは違って地方には西洋音楽の高度な知識と技量を持つ人間は数えるほどしか居なかった。本論文は、大日本家庭音楽会のヴァイオリンの通信教育を文献から調査し、通信教育が西洋音楽の普及、特に地方都市における西洋音楽の普及に重要な役割を果たしたことを明らかにする試みである。

まず、テキストの発行部数と受講者の居住地に注目し、どの程度発行され、どういった地域に普及したのかということを確認する。次いで、どのように受講生が講座を申し込み、楽器の演奏を学んでいったのかという観点から講座のシステムと学習内容を示す。そして最後に、会誌の投稿欄を調査し、手紙による会員同志の交流を確認する。

結論では、日本中に音楽の通信教育が普及した要因として、次の4点を指摘する。1.楽器と教材をパッケージ化し、簡単に楽器練習ができるような商品として売り出したこと、2.当時の人々にとって身近だった日本音楽を土台にしたヴァイオリン練習方法を構築したこと、3.特許戦略による事業の独占化と楽譜の標準化、4.会員のネットワークが音楽活動を促進したこと。